

人間はどこまで動物か ①

人間は生後一歳になって、真の哺乳類が生まれた時に実現している発育状態に、やっとたどりつく。そうだとすると、この人間がほかのほんとうの哺乳類なみに発達するには、われわれ人間の妊娠期間が現在よりもおよそ一年のばされて、約二十一ヶ月になるはずだろう。

—————アドルフ・ポルトマン『人間はどこまで動物か』

人との出会いと同じように、本との出会いには運命のようなものを感じる。

中学生の頃、毎日通っていた書店の本棚にノーベル賞の受賞者として知られる、コンラート・ローレンツの『ソロモンの指環—動物行動学入門』という本が並んでいた。かつてシートン動物記やファーブル昆虫記が大好きだった筆者は、この難しそうな本の背表紙を見るたびに、いつも手に取りたい衝動にかられるのだけれど、なかなか手を出すことができない。この本を翻訳した日高敏隆という人も、なんだか面白そうな本をたくさん書いている。

気になりながらもが月日が過ぎ去り、あるときその近くにあった別の本を手を取った。タイトルは、『人間はどこまで動物か』。著者はスイスのバーゼル大学教授であり、動物学や生物学の権威であった、アドルフ・ポルトマンである。

出版形態は新書なので、もちろん初学者にも分かりやすく書いてある。しかし、内容は決して中学生が興味を持つようなものではなかった。でも、なぜか本のタイトルが気になって、埃をかぶっている古びた新書を購入し、夢中になって読んだのを覚えている。それから、この本はいつも私の書棚の片隅にあり、これまでに何回も読み返した。アメリカへ留学していた時期にも、たしか書棚のどこかに置かれていたはずだ。

こんな内容の本に熱中したのなら、理系に進んでも良かったはずだが、不思議と動物学や生物学に興味を持つことはなかった。エラノス会議の主要人物の一人であった、ポルトマンの文章には、科学者らしくない哲学的・文学的な表現が少なくない。生物学の調査結果や統計資料の分析ではなく、「人間とは何か」とか、「文化とは何か」といったテーマに関するポルトマンの思索の方に、むしろ興味を持ったのだと思う。だから、大学に赴任して「人間論」という科目を担当することになったとき、最初に手に取ったのもこの本であった。

*

本書でポルトマンが提唱した、最も有名なテーゼの一つは「生理的早産」という概念である。

まず、ポルトマンは生まれたての動物の状態にもとづいて、極めて広範な比較研究の視座から動物を「巣に坐っているもの（就巢性）」と「巣立つもの（離巢性）」に分類する。しかし、ポルトマンはもともと鳥類の形態学や発達史を専門とし、さらに広い生物学の研究に進んだ人である。このため、この分類も本来は鳥類の生態研究に使われた概念であって、そのまま読み進めると頭が混乱することになる。多くの哺乳類が「巣立つもの

（離巢性）」として、分類されているからだ。

簡単に言ってしまうと、生まれてすぐに目を開いて起き上がり、走り回ることのできる仔馬などが「離巢性」の動物として分類され、これに反して多くの鳥類のように、長い間巣にとどまって自ら食することもできない動物が、「就巢性」の動物として分類されているのである。哺乳類や鳥類といった分類とは、カテゴリーの基準が異なることに注意しなくてはならない。

だから、大学生になってドイツ語を学び始めたとき、この日本語訳は不適切なのではないかと考えて、すぐに独和辞書を使って原語の意味を確認してみた。もとの言葉の意味からすれば、「巣に留まっているもの」と「すぐに巣を離れるもの」といった訳語の方が、本来の言葉の意味に近いのではなかろうか。

*

離巢性の動物は、進化のうえでかなり特殊化した身体の構造をもち、脳が発達し、長い妊娠期間を経て少数のこどもを産む。ちょうど、この本を購入した中学生の頃に、「オルカ」という映画が公開されていた。たぶん、この映画の1シーンだったと思うが、海中でのシャチの出産シーンが脳裏に焼き付いている。大海原のただなかで生まれた子シャチは、すぐに親シャチと同じように泳ぎだす。親シャチと同じように行動できなくては、海中の子シャチは生きていくことはできない。シャチばかりでなく、基本的に離巢性の動物は出産後すぐに親と同じように行動する。生まれて間もない競走馬は、ほどなく立ちあがって軽やかなステップを踏むものだ。

霊長類は、基本的に「巣立つもの（離巢性）」なので、本来は誕生の時からよく発達した感覚器官と開いた眼を持ち、生後間もなく親と同じような行動を取ることができるはずである。しかし、人間の新生児はなぜか極めて未発達な状態で生まれてくる。生まれたての人間の赤ちゃんは、ほとんど自分では何もできない。ポルトマンの表現を引用してみよう。

霊長類（人類と猿類）は「巣に坐っているもの」（就巢性）の誕生時の状態に相当する段階を母胎内で経過していく。したがってその誕生の瞬間に、その発達ははるかにすすんだ段階に到達していることになる……このようにながいが発達の段階を通りながら、人間の新生児は不思議にもおそろしく未成熟で能なしである。この矛盾は、われわれ人間の形成過程が特別なもので、人間に特有なものだということを思わせる。(39頁)

人間は「巣立つもの」として生まれるはずの動物である。にもかかわらず、人間の新生児は、なぜ極めて未発達な状態で生まれてくるのか。その理由こそが「生理的早産」の仮説であり、人間に固有の存在条件の一つなのである。

[参考文献]

アドルフ・ポルトマン（高木正孝訳）『人間はどこまで動物か』岩波新書、1961年。